ねらいと使い方　ジャーナリズム倫理を絶えず問いなおす

報道倫理に関する本は、大手の新聞社や放送局からいくつも出版されていますし、有名な記者たちも筆を執ってきました。それらの多くは個人的な経験に基づいて書かれています。大物ジャーナリストたちがつづる手柄話や失敗談はおもしろく、記者志望の学生や新人ジャーナリストを魅了します。しかし、「体験的ジャーナリスト論」の大半は、残念なことに理論的な背骨を欠いています。

他方、学問的にしっかりした倫理学の研究書は学者たちが書きます。しかし、取材現場をかけずり回るジャーナリストたちが読んでいるようには見えませんし、取材のルールブックを作成するベテラン記者たちも「功利主義」や「義務論」など職業倫理に不可欠な概念を参照しているようにも思えません。

業界の倫理、企業の内規

日本におけるジャーナリズムの倫理は、業界が設定した「かくあるべし」的な理想や理念と、各メディア企業が内部で運用している「べからず」集のようなマニュアル類から構成されることがほとんどです。新聞記者や放送記者たちも組織の一員であるかぎり「かくあるべし」と「べからず」の制限を受けています。

日本ではジャーナリスト教育を大学が担う伝統がなく、もっぱら個々の企業内で記者教育がおこなわれてきました。学生時代にジャーナリズムについて体系的に学んだ経験のない記者にとっては、勤務先の上司やベテラン記者と報道

マニュアルが教科書です。

しかし、上司やマニュアルがいつも頼りになるとは限りません。みながマニュアルどおりに行動したため失態を招いた例や、掟を破った記者によって改善がもたらされた例もあります。ベテラン記者も常に正しい判断をするわけではありません。実務家として名を成した人が、自身の成功体験に固執する「成功者バイアス」のため、悪しき指導者となる例は、報道の世界以外でもみられる現象です。

ジャーナリストが難問に直面したとき、いったいなにを基準にどう決断すればいいのでしょうか。

道徳的な20の難問

ジャーナリズムの世界には、百年単位で受け継がれてきた原理や手放してはいけない鉄則がありますが、わたしたちの情報環境はすさまじい速度で変化しています。ジャーナリズムの倫理も問い直しは必要でしょう。

この本には、報道現場における20の難問が収録されています。ほとんどが過去に実際に起こった事例をもとにしています。どの事例も簡単に答えは出ないものばかりです。ただ、難問だからという理由で放置してよいはずもありません。日ごろから絶えざる問い直しを心がけておくべきです。

この本の狙いは三つあります。第一は、現場の経験知に頼りがちな記者たちに一度立ち止まって考えてみる機会を提供することです。「勉強する時間がない」「問題意識を共有する場がない」というジャーナリストたちを少しでも触発できれば幸いです。

第二は、メディアの問題に関心を寄せる市民と語り合うことです。「マスゴミは信用ならない」と頭ごなしに否定する人もいますが、ちょっと待ってほしい。この本を読めば、取材する側の視点から報道倫理の悩ましい問題を考え

てみる機会がもてるはずです。

第三は、報道の仕事に就こうとしている若い人たちに、将来出会うであろうジレンマを知っておいてもらうことです。答えは一つではありません。優れた記者になるには数多くの事例と理論をみずからの血肉にしておく必要があります。

本書の読み方

この本には全部で5つの章があります。第1章から順に「人命と報道」「報道による被害」「取材相手との約束」「ルールブックの限界と課題」「取材者の立場と属性」です。各章には4つのケースを設けました。

ケースはすべて、「思考実験」→「異論対論」→「実際の事例と考察」の3パートで構成されています。「思考実験」では、ジャーナリズムの道徳的難問が物語の形式で示されます。思考実験の最後には、AかBかの選択肢が与えられます。どちらが正しく、どちらかが間違っているわけではありません。まずは直観的にじぶんがどちらの立場を支持するかを心に思い浮かべてください。

次に「異論対論」のページを開いてください。AとBの対立する二つの立場から交互に意見を並べました。ここに示された見解は、著者のわたしが脳内で議論したものです。足りない論点を補足したり、別の視点で考えたり、ちがう条件ならどうなるか比べたり、ほかの立場ならどうなるかなど、ぜひいろいろ検討してみてください。

最後に「実際の事例と考察」に進んでください。各ジレンマの事例を考えるうえで必要な基礎知識と、実際の事例について詳しく述べられています。「現場の知」だけでは得られない「学問の知」も記されています。

ワークショップでの利用

もし、この本をグループディスカッションなどのワークショップで利用する場合、「思考実験」を読んだ時点でいったん本を閉じて1回目のディスカッションをしてみましょう。じぶんの意見を他者に押しつけるのではなく、異なる意見に耳を傾ける機会です。じぶんはなぜA／Bの立場を支持するのか、冷静に語り合ってみましょう。必要に応じてじぶんの意見を修正し、最終的にグループごとにひとつの意見にまとめてください。

次に、「異論対論」のページを開き、そこに記されている議論の流れと、グループ内での議論との違いをひとつずつ検討しみましょう。異論対論に記されている意見とじぶんたちの意見と違いはどこにあるでしょう。みなさんの議論は十分だったでしょうか。ディスカッションや異論対論で示された観点から、あなたはじぶんの意見を変えるでしょうか。ここで2回目のディスカッションをしてみましょう。

最後に、振り返りのために「実際の事例と考察」を読んでください。「事実は小説より奇なり」と言いますが、実際に起こった出来事の重みをかみしめてください。

目　次

ねらいと使い方　ジャーナリズム倫理を絶えず問いなおす

第1章　人命と報道

CASE：001　最高の写真か、最低の撮影者か――2
CASE：002　人質解放のために警察に協力すべきか――12
CASE：003　原発事故が起きたら記者を退避させるべきか――22
CASE：004　家族が戦場ジャーナリストになると言い出したら――34

第2章　報道による被害

CASE：005　被災地に殺到する取材陣を追い返すべきか――46
CASE：006　被害者が匿名報道を望むとき――58
CASE：007　加害者家族を「世間」から守れるか――72
CASE：008　企業倒産をどのタイミングで書く――86

第3章　取材相手との約束

CASE：009　オフレコ取材で重大な事実が発覚したら――100
CASE：010　記事の事前チェックを求められたら――112
CASE：011　記者会見が有料化されたら――122

CASE：012　取材謝礼を要求されたら――132

第4章　ルールブックの限界と課題
CASE：013　ジャーナリストに社会運動ができるか――142
CASE：014　NPOに紙面作りを任せてもいいか――154
CASE：015　ネットの記事を削除してほしいと言われたら――166
CASE：016　正社員の記者やディレクターに表現の自由はあるか――178

第5章　取材者の立場と属性
CASE：017　同僚記者が取材先でセクハラ被害に遭ったら――188
CASE：018　犯人が正当な主張を繰り広げたら――202
CASE：019　宗主国の記者は植民地で取材できるか――214
CASE：020　AIの指示に従って取材する是非――226

あとがき　ジャーナリストの理想へ向けて　239
索引

■思考の道具箱■

傍観報道　8　／番犬ジャーナリズム　18　／共通善　20　／危険地取材　28　／臨時災害放送局　31　／ＣＰＪ　39　／自己責任　41　／メディアスクラム　52　／合理的な愚か者　54　／サツ回り　64　／犯罪被害者支援　68　／熟議　71　／被疑者と容疑者　77　／世間　79　／特ダネ　91　／倒産法　95　／コンプライアンス　98　／知る権利　105　／取材源の秘匿　108　／２種類の記者クラブ　110　／地位付与の機能　117　／ゲラ　119　／報道の定義とは？　121　／小切手ジャーナリズム　128　／記者会見　130　／「ギャラ」　138　／キャンペーン報道　148　／アドボカシー　150　／黄金律　152　／ＮＰＯ（非営利組織）　160　／地域紙と地方紙　163　／アクセス権と自己情報コントロール権　173　／良心条項　184　／記者座談会　208　／ゲリラとテロリズム　211　／ポストコロニアリズム　222　／倫理規定　225　／ロボット倫理　233　／発生もの　235

第１章
人命と報道

CASE：001
最高の写真か、最低の撮影者か

二日前、とある国への潜入に成功した。先進国からは初のフォトジャーナリストだと思う。長引く内戦と干ばつ、そして飢餓。周辺から漏れ伝わってくるその国の状況は深刻だった。無名の自分を売り出すチャンスだし、社会的にも意義のある仕事だ。

炎天下、乾いた荒野を車で走っていると、蜃気楼のむこうに大勢の人々が歩いていた。その数は数百人に上るだろうか。わたしはその方向にハンドルを切った。車を降り、「PRESS」と記した腕章とカメラを掲げ、ゆっくり近づく。みすぼらしい身なりの群れは難民キャンプを目指していた。乳飲み子を抱えた女。杖をつき息を切らす老人。大きな荷を背負う男たち。ほとんどの人は着の身着のままで逃げてきたように見える。その足取りは重い。

彼らが暮らしていた町は、救援物資を略奪する夜盗集団に襲われ暮らせなくなったという。

「些細なことでいがみ合って、復讐の繰り返しがおさまらないんだ」

「だれも墓穴を掘らないから死体の山できて、野犬が人間の味をおぼえちまった」

嘆き悲しむ人々に同情心がわく。だが、正直に言うと、わたしはどこか興奮に包まれていた。あばら骨が浮き出た肌をあらわにして涙する老

1　思考実験

人や、飢えのため瞬きも忘れたようになった赤ん坊は、格好の被写体だ。すごい報道写真が撮れる予感がする。もし欧米の著名な新聞や一流の写真雑誌に掲載されれば、もう誰もわたしを「無名の写真家」とは呼ばなくなるだろう。なんとしてもここで踏ん張って、最高に刺激的な作品を撮りたい。

地獄、地獄、地獄。そんな言葉を心の中でつぶやきながら、わたしは人の群れを縫うように歩き続けた。何十回とシャッターを切った。だが……。

絶妙のアングルから、千載一遇のシャッターチャンスを逃さず、完璧な構図で世界を切り取る。何万語もの文章よりも、飢餓や戦争、暴動、貧困、抑圧、差別の現実を雄弁に語る。わたしは今、世界の報道写真家がうらやむ環境に身を置いているはずなのに、決定的な一枚が撮れない。「これじゃぁ素人写真と変わらんじゃないか」

ふと、難民の群れから少し離れたところを見ると、全裸の子供がうずくまっていて、その向こうに巨大なハゲワシが舞い降りてきた。死肉を主食とするハゲワシほど不吉な鳥はいない。黒い肌の子供は、体に比して大きな頭を地面にすりつけるような格好で、前のめりに倒れていた。中世ヨーロッパで描かれた宗教画のようだ。命乞いをする貧者を悪魔が飲み込もうとしているみたいに見える。

子供とハゲワシ。一三五ミリのレンズに映った二つの被写体は、この国の人々を象徴していた。わたしは反射的に一回シャッターを切った。

だが、その瞬間、わたしの心は二つに引き裂かれた。

［A］報道を優先する立場

このままじっとして、より悲劇的な構図を狙うべきだ。ハゲワシが翼を広げたり、クチバシを開いたりすれば、もっとすごい写真が撮れるだろう。ジャーナリストは冷徹な観察者であるべきだ。

［B］人命救助を優先する立場

いますぐにハゲワシを追い払い、子供を助けに行こう。そして、難民キャンプの医療施設に送り届けるのが人の道だ。写真はすでに１枚撮ったし、もう十分だ。カメラを置いて、子供を救え。

2 異論対論［B］人命救助を優先する立場

特定の職業が求める使命より、普遍的な道徳のほうが優先する。棒きれを振り回したり、石を投げつけたりすれば、ハゲワシは簡単に追い払える。その気になればすぐに助けられる命を、みすみす助けないなんて人でなしだ。人権を尊重する社会で暮らす人々は、人間性の欠落した取材者を非難する。まずは子供を助けよう。写真はそのあとで何枚でも撮ればいい。

反論

「客観報道」なんて絵に描いた餅。新聞や雑誌の紙面は限られているし、番組に使える時間も制限がある。なにを扱い、なにをボツにするかは、編集幹部や経営者の判断とスポンサーの意向で決まっている。それに比べ、過酷な現実を取材する記者たちは、命の大切さという普遍的な価値を肌で知る存在だ。だからこそ冷淡な傍観者であってはならない。子供を救うのが人としての義務だ。

再反論

事実と意見は簡単に区別できない。ジャーナリストが伝える「事実」も主観に基づいて収集・加工されている。ファインダーに映ったものがそのまま「事実」だというのは乱暴すぎる。人々は、取材者がどの位置から撮影したかを想像するだろうし、子供の悲劇を自分の手柄にしたという批判も浴びるだろう。プロの取材者なら、そこまで考えたうえで仕事をするべきだ。

2 異論対論 ［A］報道を優先する立場

ジャーナリストの使命はニュースを届けることだ。わたしがカメラを放り出して子供を救助すれば、目の前の子は救えるかもしれない。しかし、同じような状況にある人は大勢いる。1 枚の写真が国際世論を動かし、各国から救援の環を広げる。それはジャーナリストにしかできない。そのためには、できるだけ衝撃的な作品を撮らなければならない。

反論

ジャーナリストは客観的な観察者に徹するべきである。それは報道に携わるすべてのジャーナリストが新人時代に叩き込まれる原則だ。もしハゲワシが子供を食べはじめたとしたら、その現実も記録にとどめるのが正解。わたしたちは歴史の冷徹な記録者なのだ。むろん、ジャーナリストにだって感情もあり、泣きたいときもある。だが、その前にプロとしての仕事をするのが筋だ。

再反論

事実と意見の区別。それがジャーナリズムの基本原則だ。意見を表明できるのは社説や論説だけで、記者たちは事実をありのまま伝える。それは戦時下の偏向報道への反省でもある。読者・視聴者の目となり耳となることが大切で、取材対象を攻撃したり、取材相手と取引したり、世論を誘導したりしてはならない。この場合、子供がハゲワシに食われても、それを見届ける覚悟が必要だ。

3　実際の事例と考察

［思考実験］のモデルは「ハゲワシと少女」と題する有名な報道写真であり、［異論対論］では論争のポイントを整理した。

報道と人命のどちらを優先するか。この二つを並べたとき、一般市民の道徳感に近いのは人命を優先する立場だろう。「人の命は地球よりも重い」という言葉がある。法を曲げても人命を第一に考えるべきだ。そんな人道的な意見はシンプルで力強い。これに反論するには勇気がいる。

●――市民感情とプロ意識の間にある溝

たしかに、シャッターチャンスを逃してでも目の前の子供を救う行為は崇高だ。ただし、いつも報道より人命救助を優先するルールを自分に課してしまうことは、ほんとうに道徳的な結末をもたらすのだろうか。

目の前の子供を救うことを責める人はまずいないだろう。だが、［思考実験］でみたような内戦と干ばつに苦しむ人は、世界に大勢いる。たとえば、ハゲワシに襲われそうな子供を救出して医療施設に届けたとしても、似たような状況にある子供はいくらでもいる。子供だけではない。杖をついた老人から背負ってほしいと頼まれ、妊婦からは肩を貸してほしいとせがまれたらどうするだろうか。家族が今にも死にそうなので医者を呼んできてほしいと泣いてすがられたら……。カメラを放りなげ、人助けに走り回っていたら、「悲劇」を世界に伝えて、国際援助の世論を喚起するというジャーナリストの使命が果たせなくなる。ジャーナリストがジャーナリストの仕事をしなくなるのは、本末転倒である。

とはいえ、人命そっちのけでカメラを向けるだけの取材者は分が悪い。事件や事故の現場を走り回る記者たちを「人の不幸をメシの種にしている」と難じる人は少なくない。じっさい、新聞産業は災害や戦争で市場規

模を拡大した。

●――悲劇を撮ろうとするハイエナ

数々の批判を浴びても、主流メディアのジャーナリストたちは、報道優先の立場に理解を示す傾向が強い。

毎日新聞記者としてベトナム戦争を報道した徳岡孝夫は自身の体験を踏まえて、ジャーナリストは「悲劇」をむしろ「魅力的な素材」として興奮する職業的第三者であることを隠そうとしない。そのうえで「人類同朋への高貴な共感者ではなくニュースのハイエナ」であることを認め、人道主義の立場からの非難を「お茶の間の正義」と批判した[1]。

こうした徳岡の立場は、理論的にはアメリカ型のリベラルなジャーナリズム倫理に近い。その第一人者ともいえる、コロンビア大学教授のステファン・アイザックスはこう語った[2]。

「ジャーナリストの使命は歴史の瞬間を記録し、それを広く知らせることである。ジャーナリストは現実に手を加えてはならない。ジャーナリストは取材しようとしている現実を変えてはならない責任がある。カメラマンは禿鷲を追い払うべきであったという意見があるが、わたしはそうは思わない。命を救うことは彼の仕事ではない。それどころか、子どもが死んで、禿鷲がその肉をついばむとしたら、それを見届けるべきである。非常に残酷に聞こえるかもしれないが、それがジャーナリストの役割なのだ。映像や記事を持ち帰り、世の中がどんなに厳しい現実にあるかを知らせることがジャーナリストの仕事なのだ」

●――思考停止の危険性

だが、ジャーナリストも人の子であり、道徳的感情から完全に自由になれない。自分の行為を振り返って悩んだり、

罪悪感にさいなまれたりもする。

ハゲワシを追い払うか、シャッターチャンスを待つか。どちらが正しい行為なのかは軽々しく決められないが、じっくり考える時間はない。「ハゲワシと少女」はジャーナリスト教育や取材倫理の議論をするとき、かならず取りあげられる有名な道徳的ジレンマだ。

正解がないからこそ、考える価値があり、議論することで思考停止から脱出できる。ベテラン記者だけでなく、記者になって日が浅い人や、ジャーナリスト志望の学生にとって避けられない難問だろう。

■思考の道具箱■傍観報道

ジャーナリストのなかには、「事実」を「中立的」な立場から観察してありのまま報告するという規範を内面化する人が少なくない。その考え方に立てば、苦しむ人びとがいたとしても、冷静かつ正確に見届けなければならない。だが、じぶんの家族や知り合いが目の前でSOSを叫んでいたとして、それを客観的に観察して報道できるだろうか。大震災や大津波の被害に遭った地域のジャーナリストたちは、じぶんたちの行動が客観報道なのか傍観報道なのかを反問し続ける。

●――ケビン・カーターの事例

１９９３年にスーダンで、１枚のショッキングな写真が撮影された。骨と皮になった幼い女の子が荒れ地にうずくまり、その背後でハゲワシが見つめている。この衝撃的な瞬間をおさめた作品は、ニューヨーク・タイムズ紙に掲載された。

アメリカでもっとも権威ある新聞に載ったことで、世界の視線が一挙にスーダンに注がれた。１９９０年代のアフリカではソマリアが国際的なニュースのおもな発信地だった。内戦と干ばつで無政府状態の「アフリカの角」に、アメリカ軍指揮下の多国籍軍が国連決議に基づいて派遣されていたのだ。そのほか、南アフリカではネルソン・マンデラが１９９１年にアフリカ民族会議（ＡＮＣ）議長に就任し、反アパルトヘイト闘争を指導していた。

●――ピュリツァー賞、そして自殺

報道写真家たちは、ときに危険を賭して無理な取材を敢行する。有力新聞や国際通信社に扱ってもらうには、平凡な日常を送る人たちの心を揺さぶる光景を、絶妙のタイミングと最高のアングルでレンズに納めなければならない。戦場での暴力、飢えて痩せこけた子供、大自然の猛威、そして、奇跡の救出劇や涙を誘う感動的な瞬間だ。

南アフリカ出身の若い写真家ケビン・カーターは「ハゲワシと少女」で、１９９４年４月にピュリツァー賞企画写真部門賞を受賞した。この賞はジャーナリストにとって「最高の栄誉」とされ、カーターは「時の人」となった。

だが同時にカーターは、激しい批判にさらされた。

「カーター氏はカメラマンとしては満点だろう。しかし一人の人間としてはマイナス十点だ」「（ピュリツァー）賞は人間性や倫理とは無関係に選ばれるのか」。アメリカの新聞に、そんな投書が掲載され[3]、カーターは同業のジャーナリストたちからも「なぜ少女を助けなかったのですか」と問われ続けた。

●――カーターの涙

カーターはその年の7月、ヨハネスブルク郊外で自殺した。まだ33歳という若さだった。

朝日新聞ニューヨーク支局（当時）の佐藤吉雄は、生前のカーターに電話でインタビューしている。カーターは撮影直後を振り返りこう話した[4]。

「とにかく夢中でシャッターを押した。そして『シッ、シッ』と声を上げて追い払った。少女はやがて立ち上がり、再びよろよろと村に向かい始めた。／このときの気持ちを何と表現したらいいだろう。あまりの衝撃に近くの木の下

に座り込んでしまった。気を落ち着けようとたばこをいっぷく吸った。涙がこみ上げてきた。しばらく泣き続けたのを覚えている。少女がその後、どうなったのか、分からない。もちろん名前も部族も分からない」

さらに、なぜ少女を助けなかったのかという批判には、こう答えている。

「そういう反響は、それこそ世界中から来た。私はハゲワシを追い払い、少女が村に向かうのを見守る以外、何もしなかった。それ以上の質問には答えられない」

だが、毎日新聞記者の藤原章生によれば、カーターが撮影した少女の近くには母親がいて、撮影直後のカーターは全身で喜びをあらわしていたという[5]。藤原はスーダンでカーターと行動をともにしたとされるジャーナリストのジョアオ・シルヴァから話を聞いた。シルヴァとカーターは苦労して密入国し、同じ場所で似た境遇の子供たちを撮影していた。シルヴァは自分の撮影を振り返ってこう話す。

「そのとき？　だから、ゲリラ兵がいないから、まったくしようがねえなあって思って、そしたら一応、飢餓の子も撮っておこうと思って、構えて、待って、動きが欲しいなっていろいろ、角度を決めて、そしたら、目をふさいで泣くような格好をしたから、カシャカシャカシャって何枚か撮って。（中略）親？　親はすぐそばで食糧をもらうのに必死だよ。だから手がふさがってるから、子供をほんのちょっと、ポン、ポンとそこに置いて」

シルヴァが撮影した写真はまったく注目を集めなかったのに対し、カーターの作品はピュリツァー賞を受賞した。

「ケビンが撮った子も同じ。母親がそばにいて、ポンと地面にちょっと子どもを置いたんだ。そのとき、たまたま、神様がケビンに微笑んだんだ。撮ってたら、その子の後ろにハゲワシがすーっと降りてきたんだ、あいつの目の前に。あいつ？　あの時、カメラ、借りてきたやつだから、１８０ミリレンズしか持っていなかったんだ。だから、そーっと、ハゲワシが逃げないように両方うまくピントが合うように移動して、十メートルくらい？　それくらいの距離か

ら撮ったらしい。で、何枚か撮ったところで、ハゲワシは、またすーっと消えたって」

カーターから直接取材した朝日新聞の佐藤吉雄によれば、カーターはハゲワシを追い払って少女に涙した人道主義者に思える。ところが、毎日新聞の藤原章生がシルヴァへのインタビューで明らかにした彼の姿はずいぶん異なる。

「時間がないんでケビンのところに戻ったら、あいつ仰向けになって、煙草をスパスパ吸って、空に向かってうわごと言ってんだよ。俺はその時点では、そんなすごい写真撮ってたって知らないから、また、ケビンがおかしくなっているって思ったけど、あいつ、『アイヴ、ガッタイトゥ（撮った）、やったんだ、撮ったんだ、すごいの撮った、俺、撮ったんだ』なんて涙流さんばかりに興奮して」

シルヴァ自身もカーターが撮影したようすを見ていたわけではない。真実は藪の中。もはや確認しようがない。

カーターがどんな人物であったかは、２０１０年公開のカナダ・南アフリカ合作映画『バンバン・クラブ 真実の戦場（The Bang Bang Club）』（スティーブン・シルヴァ監督）で描かれている。

[注]

[1] 徳岡孝夫「ハゲワシと少女：カメラマンは正しかった」『諸君！』１９９４年10月号64-71頁

[2] 柏倉康夫『マスコミの倫理学』丸善、２００２年、６頁

[3] 佐藤吉雄「ピュリツァー賞企画写真部門賞受賞「ハゲワシと少女」論争：カメラマンはなぜ自殺したか」『新聞研究』１９９４年９月号60頁

[4] 佐藤前掲書59頁

[5] 藤原章生「あるカメラマンの死」『絵はがきにされた少年』集英社、２００５年、17-36頁

[参考文献]

ハル・ビュエル『ピュリツァー賞受賞写真全記録第２版』河野純治訳、日経ナショナルジオグラフィック社、２０１５年

あとがき　ジャーナリストの理想へ向けて

本書はジャーナリズムの規範を考えるケースブックなので、倫理学の体系に基づいて章立てを考えたわけではありません。ただ、メディア企業の研修担当者たちには、最小限これだけは知っておいてほしいと思うことを最後に記しておきます。

哲学の一分野である倫理学は、大きくはメタ倫理学、規範倫理学、応用倫理学に分類されます。このうち規範倫理学では、功利主義や義務論などをめぐる膨大な議論が繰り広げられてきました。

功利主義と義務論

功利主義とは、ジェレミー・ベンサムが残した「最大多数の最大幸福」に象徴される考え方で、結果から道徳的価値を考えることから「帰結主義」のひとつとされています。具体的にいうと、王様を特別に扱うのではなく、身分の別なく人々の「幸福」の量を均等に計算し、その社会の「幸福」の総量を最大にしようとする原理です。それに基づけば、王よりも数が多い農民や平民の「幸福」を重視する社会が目指されます。しかし、問題もあります。多数者の利益だけが優先されれば、少数意見が無視され、マイノリティや被差別者の権利が侵害されかねません。

そんな帰結主義と対立する立場に、イマヌエル・カントの義務論があります。結果から倫理を考えるようになれば、「嘘も方便」のような振る舞いが際限なく拡大し、収拾不能になります。そこでカントは道徳的な価値を目的の良さ

で決めるべきだと考えました。人間には人として守るべき絶対的な命令（定言命法）がある、とカントは説きましたが、わたしたち凡人はカントが考えるほど理性的ではありません。

規範倫理の学者たちによって鍛えられた思考の筋道や理論は堅牢です。それらを総動員して、現実の問題と格闘するのが応用倫理学です。この分野は21世紀に入り、科学技術倫理や環境倫理、情報倫理など個別分野ごとに大きな注目を集めています。応用倫理は理論家と実務家の協働が前提となります。ただ、ジャーナリズムをめぐる倫理については、業界人の経験論（体験的ジャーナリスト論）が幅をきかせ、応用倫理学の一分野として確立されているとは言えません。

こうした理論的背景を知るための参考書として、入門的な『本当にわかる倫理学』（田上孝一、日本実業出版社）、『功利主義入門』（児玉聡、ちくま新書）、『サンデルの政治哲学』（小林正弥、平凡社新書）などがあります。ケアの倫理を扱ったジャーナリズム理論では『〈オンナ・コドモ〉のジャーナリズム』（林香里、岩波書店）があり、『マス・コミの自由に関する四理論』（F・S・シーバートほか、東京創元社）などの古典も目をとおす価値があると思います。これらを手がかりに関心をさらに広げ、理解を深めていってください。

企業の枠を超えて

メディア産業に長らく横たわってきた思想は「表現の自由」を基調とする功利主義で、不特定多数の読者や視聴者に提供される情報の価値が視聴率や部数によって計られがちです。ジャーナリズム研究者の林香里は「最大多数の最大関心事」という表現で、メディア産業が古典的な功利主義の段階にとどまっていることを批判しています。この功利主義的な考え方は、企業統治にも影響しています。〈CASE17〉のセクハラ問題で検討したような、社内の少数

者である女性の人権が抑圧されたり、組織のために個人が犠牲になったりした例を直接知るメディア関係者は多いはずです。

ちょっとやそっとで変えられない構造的な問題があったとしても、個々のジャーナリストが業界や企業の論理と一体化しなければならない道理などありません。報道の目的は、公共の利益に資する情報を市民に報告すること。災害や事件事故を速報したり、埋もれていた事実を掘り起こしたり、複雑な問題を論評したりすることによって、よき社会をめざす――個々のジャーナリストはそんな理想を広く共有し、連帯できると信じています。

本書は勁草書房編集部ウェブサイト「けいそうビブリオフィル」に２０１６年から連載をした内容をもとにしています（http://keisobiblio.com/author/hatanakatetsuo/）。連載全部は収録していませんが、連載にはないケースも追加しました。このウェブ連載は今後も不定期に更新していく予定です。考えてみたいケースや感想をお伝えいただけると幸いです。最後に、本書の企画段階から完成に至るまで骨を折ってくれた勁草書房の鈴木クニエさんへの感謝を記します。

２０１８年６月

畑仲哲雄